

令和 4 年 6 月 15 日現在

機関番号：31305

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2021

課題番号：17K04438

研究課題名（和文）ネット上における攻撃行動の促進要因と抑制要因の検討

研究課題名（英文）Examination of factors that promote and suppress aggressive behavior on the Internet

研究代表者

森本 幸子（Morimoto, Sachiko）

東北医科薬科大学・教養教育センター・准教授

研究者番号：10398539

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ネット上での攻撃行動の促進要因を、縦断調査を用いて検討することを目的とした。オンライン調査を2回実施し、SNS上の攻撃行動の促進要因を交差遅延効果モデルを用いて検討した。その結果、第1回調査時点で、SNS上で攻撃行動を多く行った人ほど、第2回調査時点で他者からの拒絶経験の影響を強く受けていた。また、第1回調査時点で、他者から受け入れられた経験の影響を強く受ける人ほど、第2回調査時点でSNS上での攻撃行動が多くみられた。以上の結果より、現実場面における周囲の人からの受容あるいは拒絶経験の影響が、SNS上での攻撃行動の促進に関与している可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、何がSNS上での誹謗中傷などの攻撃行動の原因となるのかについて、縦断調査を用いて検討した。その結果、現実場面で人から受け入れられたことを「よかった」と感じている人ほど、SNS上での攻撃行動が増えることが分かった。身近な人々に受け入れられたと感じることで不安が低下し、安易にSNS上で相手に対して攻撃的な態度をとるのかもしれない。この点については再度検討する必要があるが、本研究の結果、現実場面で対人関係が、SNS上での攻撃行動に影響を及ぼしている可能性が明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine the factors that promote cyber aggression using a longitudinal survey. We conducted two online surveys and examined the factors that promote aggressive behavior on SNS using the cross-lagged effect model. As a result, the aggressive behavior on SNS during the first survey predicted the impact of the experience of rejection by others during the second survey. In addition, the impact of acceptance experience from others during the first survey predicted aggressive behavior on SNS during the second survey. From the above results, it was suggested that the influence of acceptance or rejection experience from surrounding people in the actual situation may promote aggressive behavior on SNS.

研究分野：臨床心理学

キーワード：SNS 攻撃行動 対人関係

1. 研究開始当初の背景

総務省(2013)によると、ソーシャル・ネットワーキング・システム(以下、SNS)とは、登録された利用者同士が交流できる Web サイトの会員サービスとされる。SNS の利用目的は主にコミュニケーションや情報収集・拡散であり、SNS は友人や知人らとのコミュニケーションや交流を促進する場あるいは仕組みとして多くの若者に利用されている。このように SNS は便利なシステムである反面、SNS に関する様々なトラブルも報告されている。書き込みやメールでの誹謗中傷、いじめ、個人情報の流出、誘い出しによる性被害や暴力行為、ソーシャルゲームの中毒性などと同時に、「SNS 疲れ」と呼ばれるような SNS でのコミュニケーションにストレスを感じる人も増えている(高橋・伊藤,2016)。中でも、ネットワーク上での誹謗中傷や相手への脅迫、相手の名誉を傷つけるコメントを投稿するなどの攻撃行動はネットいじめと呼ばれるが、内閣府の 2007 年の調査では、高校生の 20%、中学生の 8%にネットいじめが認められたことが報告されており、多くの中高生がネット上で攻撃を受けた経験があることが明らかとなっている。

では、ネット上での攻撃行動はなぜ生じるのだろうか。先行研究では、ネットワーク利用時間が長いほどネット上での攻撃経験が多く、現実場面での攻撃性が高くなることが報告されている(内海,2010)。他にも、現実場面での居場所のなさがネットの依存的な利用を介して、現実場面での敵意的認知と結びつくことが明らかにされている(藤・吉田,2009)。このように、先行研究によって、ネット上での攻撃行動がどうして生じるのかについては、徐々に解明されつつある。しかし、先行研究では、メール、チャット、オンラインゲームなどに関する攻撃行動にとどまり、多くの若者が使用している SNS における攻撃行動についてはほとんど検討されていない。また、同じ SNS であっても、LINE は Twitter よりも他者の反応を気にしてすぐに返事を返す傾向が強いが、Twitter は他者からの挑発的な書き込みを無視する傾向が LINE より強いなど、利用時の行動が異なることが分かっている(高橋・伊藤,2016)。ソーシャルメディアによって異なる利用行動をとるのであれば、SNS 上での攻撃行動を検討する際も、ソーシャルメディアごとに検討する必要があるだろう。しかし先行研究の大半は、インターネットという大枠での検討にとどまり、ソーシャルメディアごとにネット上での攻撃行動に関して検討していない。

加えて、これまでネット上での攻撃行動に与える行動規範の影響も検討されていない。Twitter 利用者を対象として行動規範を調べた研究では、開設年度が古い人ほど規範意識が緩やかであることが報告されている。Twitter 上のマナーや行動規範は個人の自由意思に任せられた緩やかなルールのようなものであり、行動規範の共有については性別や開設時期によっても異なることが指摘されている(水沼・菅原・池内,2013)。これらの行動規範やネット使用上のルールへの正しい認識が、ネット上での攻撃行動を減少させるという指摘もある(熊崎・鈴木・赤坂・坂元・檀淵,2012)。そのため、行動規範とネット上での攻撃性との関連についても検討することが必要であろう。

さらに、先行研究の多くは横断研究的手法を用いている。そのため、ネットの依存的な利用がネット上での攻撃行動を増加させるのかどうか、その因果関係に踏み込んで分析しているわけではない。実際に因果関係に踏み込んだ分析を行うためには、縦断調査を用いる必要がある。

今や 10~20 代の若者の大半が友人など他者とのやり取りに SNS を用いている現状を鑑みると、どのような要因がネット上での攻撃行動を促進するのか、そのメカニズムを解明し、ネット上での攻撃行動に対する抑制因子を探ることが急務だと考えられる。

2. 研究の目的

上記の先行研究の問題点を考慮し、本研究ではネット上での攻撃行動の促進要因と抑制要因を検討することを目的とした。特に SNS の中でも Twitter に焦点を当てて検討を行い、どのような要因がネット上での攻撃行動の促進に影響を与えるのか、あるいは抑制に影響を与えるのかについて因果関係に踏み込んだ検討を行うこととした。

3. 研究の方法

(1) Twitter 利用における行動規範尺度の作成と信頼性、妥当性の検討

Twitter の利用実態に合わせた行動規範尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討した。

(2) Twitter 上での攻撃行動の促進要因と抑制要因の検討

(1) で作成した尺度やパーソナリティ特性尺度などを用いて、ネット上での攻撃性の促進や抑制にパーソナリティ特性や行動規範意識などが関与しているのかどうかを検討した。

4. 研究成果

(1) Twitter 行動規範尺度の作成と信頼性・妥当性の検討

先行研究(水沼・菅原・池内,2013)を参考に Twitter 行動規範尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討した。大学生 241 名(男性 89 名、女性 152 名、平均年齢 18.64 ± 2.21 歳)を対象に、Twitter 行動規範尺度(水沼ら,2013)の 36 項目に加えて、Twitter 社のホームページ上に掲載されている使用ルールを参考に 27 項目を作成し、合計 63 項目について、「すべきでない」から「すべきである」までの 5 件法にて回答を求めた。また、妥当性を検討するために、バランス型社会的望ましさ反応尺度日本語版(BIDR-J)(谷,2008)とミネソタ多面人格目録(MMPI)についても回答を求めた。

Twitter 行動規範尺度の因子分析を実施した結果、「不適切な情報の投稿」、「ルール・マナー違反」、「重投稿」、「批判・ネガティブコメント」の 4 つの因子を抽出した。この 4 つの因子の内的整合性を検討するために Cronbach の係数を算出したところ、 $\alpha = .87 \sim .94$ であり、各因子ともに十分な内的整合性が認められた。また、Twitter 行動規範尺度の「ルール・マナー違反」と BIDR-J の「印象操作」、MMPI の L 尺度との間に有意な正の相関係数が得られ($r = .326, .315, p < .05$)、「批判・ネガティブコメント」と「印象操作」との間にも有意な相関係数が得られた($r = .344, p < .05$)。しかし、「不適切な情報の投稿」、「重投稿」と BIDR-J、MMPI との間には有意な相関は見られず、十分な妥当性は確認されなかった。有意な相関が見られなかった理由としては、Twitter 行動規範尺度の「不適切な情報の投稿」については、実際多くの人が同意を得ずに他人の写真を投稿している実態を踏まえると、問題だと認識されないままに不適切な情報が投稿されていることが考えられる。そのため、社会的望ましさの指標である BIDR-J や MMPI の L 尺度との相関が見られなかった可能性もある。今後は、この点についてさらに別の尺度を用いて妥当性を検討する必要があるだろう。

なお、上記の結果については日本心理学会第 82 回大会にて発表した。

(2) Twitter 上での攻撃行動の促進要因と抑制要因の検討

SNS の利用時間と現実場面での攻撃行動との横断的検討

先行研究(内海,2010)では、ネット利用時間が長いほどネット上での攻撃経験が多く、現実場面での攻撃性が高くなることが報告されているが、これはインターネット全般の利用と現実場面での攻撃性との関連を検討したものである。そこで本研究では、まずは Twitter を含めた SNS の利用時間と現実場面での攻撃行動との関連を横断的データを用いて検討した。

女子大学生 164 名(平均年齢 19.2±0.38 歳)を対象に質問紙調査を行い、SNS の 1 日当たりの利用時間、ネット上での攻撃経験、ネット上での攻撃意識、現実場面での攻撃行動について回答を求めた。相関分析を行った結果、SNS を長時間使用する人ほど、ネット上での攻撃経験や被攻撃経験は少ないものの、「ネット上に悪口を書き込んでもいい」といった攻撃的な意識を持ちやすく、現実場面でも他者との関係に働きかけるような関係性攻撃を行いやすいことが明らかとなった。これは、SNS 利用の際に、他者の攻撃的な書き込み等を見ることにより、攻撃に関する規範意識が低下し、

表1 各変数の相関係数

	②	ネット攻撃経験			現実場面での攻撃	
		③	④	⑤	⑥	⑦
① オンラインゲーム利用時間	ns.	-.26**	-.17*	ns.	.16*	ns.
② SNS利用時間		-.21**	-.14+	.14+	ns.	.15+
③ ネット攻撃経験			.49**	-.21**	-.25**	ns.
④ ネット被攻撃経験				ns.	-.20*	-.15+
⑤ ネット攻撃意識					.40**	.27**
⑥ 表出性攻撃						.46**
⑦ 関係性攻撃						

+ p<.10, *p<.05, ** p<.01

また攻撃への規範意識が低下したことが現実場面での攻撃行動を促進させている可能性も考えられる。ただし今回の調査では、調査対象者が女性のみであったので今後は男性のデータも含めて検討していく必要があると考えられる。また、横断的研究であるため、今後は縦断調査を行い、SNS 利用時間と攻撃行動との因果関係を検討する必要があるだろう。

なおこの結果については、パーソナリティ心理学会第 26 回大会にて発表した。

SNS 上での攻撃行動の促進要因と抑制要因の縦断的検討

Twitter を含めた SNS 上での攻撃行動を促進する要因を明らかにするために株式会社マクロミルを通じてオンライン上での調査を 2 回実施した。第 1 回調査は 2020 年 12 月に実施し、第 2 回調査は 2021 年 1 月に実施した。2 回の調査に共に参加し、かつ欠損値を除いた 380 名(男性 190 名、女性 190 名、平均年齢 26.26±7.15 歳)のデータを分析に用いた。調査内容は、SNS 利用歴、過去 1 週間当たりの SNS 利用状況、過去 1 か月間の他者からの受容・拒絶経験の影響度、行動規範意識と SNS 上での攻撃行動、現実場面での攻撃行動であった。

SNS 上の攻撃行動の促進要因を検討するために、行動規範意識、攻撃性、受容経験および拒絶経験の影響度との関連を、交差遅延効果モデルを用いて検討した。その結果、拒絶経験の影響度、および受容経験の影響度を用いた場合のみ、パスが有意であった(GFI=1.00, CFI=.99~1.00, RMAEA=.00~.08)。第 1 回調査時点で、SNS 上で攻撃行動を多く行った人ほど、第 2 回調査時点で他者からの拒絶経験の影響を強く受けていた。これは第 1 回調査時点において SNS 上で攻撃を行ったために、第 2 回調査時点では、「メールを送った相手から返信が来なかった」「誰かに話しかけた時、避けるような態度をとられた」といった周囲の人から拒絶される経験が多くなり、その結果として、それらの経験に対して「嫌な気分だった」とネガティブに捉えることが多かったためであると考えられる。

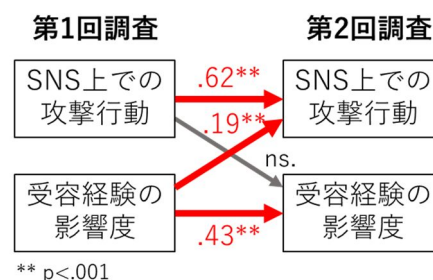


図1 SNS上での攻撃行動と受容経験の影響度との交差遅延効果モデル

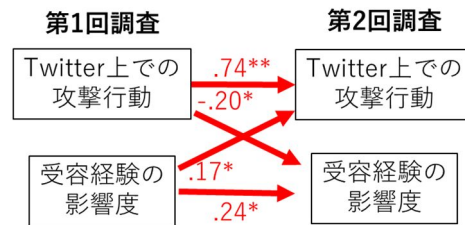
また、第 1 回調査時点で、他者から受け入れられた経験の影響を強く受ける人ほど、第 2 回調査時点で SNS 上での攻撃行動が多くみられたが(図 1)、これは第 1 回調査時点で他者から受け入れられた経験によって、他者から拒絶される不安が低下したために、第 2 回調査時点では SNS 上で他者に対して攻撃的に振舞うのかもしれない。ただし、この点については慎重に検討することが必要だと考えられる。

なお、この結果については、日本心理学会第 85 回大会において発表した。

Twitter 上での攻撃行動の促進要因と抑制要因の縦断的検討

と同じデータをもちいて、Twitter を「もっともよく使用する」と回答した 113 名(男性 65 名、女性 48 名、平均年齢 24.68 ± 7.054 歳)を対象に交差遅延効果モデルを用いた検討を行った。

その結果、受容経験の影響度を用いた場合のみ、パスが有意であった (GFI=.98, CFI=1.00, RMAEA=.00)。第 1 回調査時点で、Twitter 上で攻撃行動を多く行った人ほど、第 2 回調査時点で他者からの受容の影響を少なく見積もり、また第 1 回調査時点で受容の影響が大きいほど第 2 回調査時点で Twitter 上での攻撃行動を多く行うことが明らか



** p<.001, p<.05

図2 Twitter上での攻撃行動と受容経験の影響度との交差遅延効果モデル

なった(図 2)。これは、Twitter 上で攻撃行動を行うことで、現実場面で他者から受容される経験が減り、その結果として受容される経験による影響を小さく感じるのではないかと考えられる。また、第 1 回調査時において受容経験の影響を受けるほど、他者からの拒絶される不安が低下し、第 2 回調査時において Twitter 上で攻撃行動をとりやすいのかもしれない。この点については他の変数を含めて今後も検討する必要があるだろう。

今回は、SNS の中でも Twitter を取り上げて、SNS 上での攻撃行動がどのような要因によって促進あるいは抑制されるのか検討したが、予測に反して規範意識の低さではなく、周囲の人からの受容経験あるいは拒絶経験の影響が SNS 上での攻撃行動の促進に関与していることが明らかとなった。SNS の利用目的としては、全く知らない他人と知り合うためというよりは、現実場面で関係のある人との関係調整のために利用されることが多いことを考慮すると、安易な SNS 上での攻撃は現実場面での対人関係を壊しかねない。そのため、規範意識の低さだけでは SNS 上での攻撃行動を促進させないのかもしれない。この点については、SNS 上で攻撃行動の対象となる相手を絞ってさらに検討する必要があると考えられる。

<引用文献>

藤 桂、吉田富二雄、インターネット上での行動内容が社会性・攻撃性に及ぼす影響：ウェブログ・オンラインゲームの検討より、社会心理学研究、第 25 巻、2009、121 - 132

熊崎(山岡)あゆち、鈴木佳苗、赤坂瑠以、坂元章、檀淵めぐみ、子どものネット利用といじめ(8) ICT スキルと情報モラルがネット及び学校でのいじめの加害経験に与える 1 年後の影響について、日本発達心理学会第 23 回大会発表論文集、2012、674

水沼友宏、菅原真紀、池内淳、大学生の Twitter における行動規範に関する分析、情報社会学会誌、第 8 巻、2013、23-37

内閣府、第 5 回情報化社会と青少年に関する意識調査、2007

(<https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/jouhou5/index.html> 2022 年 6 月 15 日アクセス)

総務省、青少年のインターネット利用と依存傾向に関する研究、2013

(<https://www.soumu.go.jp/iicp/chousakenkyu/data/research/survey/telecom/2013/internei-a-ddiction.pdf> 2022 年 6 月 10 日アクセス)

高橋尚也、伊藤綾花、SNS 利用における青年の対人関係特性 Twitter と LINE 利用時の行動に注目した検討、立正大学心理学研究所紀要、第 14 巻、2016、39-50

内海しよか、中学生のネットいじめ、いじめられ体験 - 親の統制に対する子どもの認知、および関係性攻撃との関連、教育心理学研究、第 58 巻、2010、12 - 22

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 森本幸子
2. 発表標題 SNS上での攻撃行動の促進要因の検討
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 森本 幸子
2. 発表標題 Twitter行動規範尺度の作成と信頼性・妥当性の検討
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年～2019年

1. 発表者名 森本 幸子
2. 発表標題 ネット利用時間とネット上の攻撃性、現実場面での攻撃性との関連
3. 学会等名 日本パーソナリティ心理学会第26回大会
4. 発表年 2017年～2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------